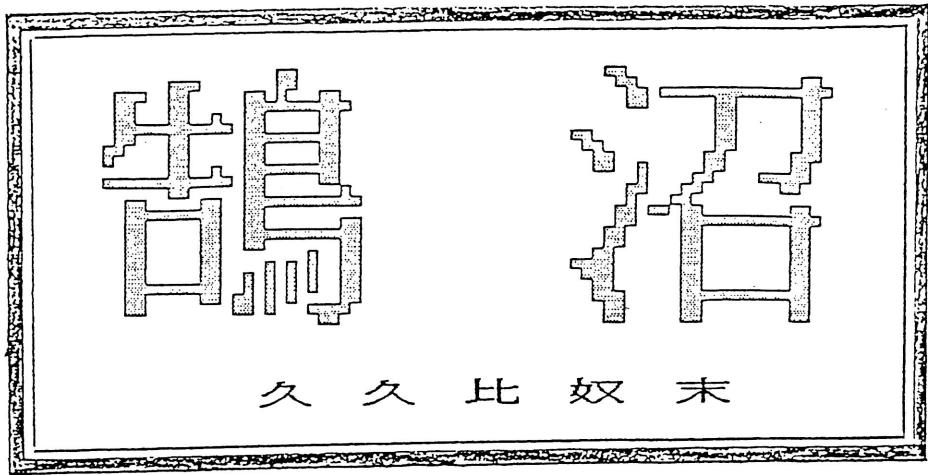




はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 4 3 号

1 9 8 8 年 7 月 1 2 日

相州鵜沼邑文学 志賀直哉 塩沢 務
鵜 沼 行 朗 読 佐藤 和子

鵜 沼 を 語 る 会

- 1めん—「文学の薫り豊かなわが郷土—文学100選決まる」
神奈川を舞台にした文学作品100点を紹介します。
- 2めん—「テーマは「愛」—YES'89神奈川県パビリオン」
「かながわの情報公開—62年度の運用状況」など。
- 3めん—お知らせのページ。
- 4めん—各地区版—県内8地域の身近な情報をお届けします。

神奈川県

県の人口と世帯 人口7,701,076 (男3,942,844女3,758,232) 世帯2,640,128 (63年4月1日現在)

「かながわの文学100選」決まる

神奈川の地を舞台にした文学作品は数多くあります。県では、3月に、とくに神奈川とゆかりの深い作品100点を「かながわの文学100選」として選定しました。文学の中の神奈川にあなたも出会ってみませんか。

文学の薫り豊かなわが郷土

「かながわの文学100選」一覧

作品名	発表年	作家名	ゆかりの主な市町村
三日幻境	明25	北村透谷	相模湖
知られざる日本の面影 (別紙・日本書見記)	27	小泉八雲	横浜、鎌倉
ふところ日記	30	川上眉山	三浦、葉山
不如帰	32	徳富蘆花	逗子
草迷宮	41	泉鏡花	横須賀、葉山
春	41	島崎藤村	横浜、小田原、鎌倉
欺かざるの記	42	園木田独歩	逗子、鎌倉、横浜
耽溺	42	岩野泡鳴	小田原
門	43	夏目漱石	鎌倉
冷笑	43	永井荷風	横浜
あきらめ	44	田村俊子	箱根
背年	44	森鷗外	箱根
洗心録	大3	幸田露伴	三浦、横須賀
あらくれ	4	徳田秋声	横浜
鶴沼行	6	志賀直哉	藤沢
漁村の秋	7	北原白秋	三浦
静かな春	7	広津和郎	鎌倉
田園の憂鬱	7	佐藤春夫	横浜
或る女	8	有島武郎	横浜、川崎、鎌倉
友情	8	武者小路実篤	鎌倉
真珠夫人	9	菊池寛	箱根、小田原
未墾地	9	福田正夫	小田原、松田
悩ましき春	10	加藤武雄	津久井、城山
トロッコ	11	芥川龍之介	真鶴、湯河原
破船	11	久米正雄	鎌倉、逗子、葉山
おせい	12	葛西善蔵	鎌倉
無限抱擁	13	滝井孝作	横須賀
淫売婦	14	葉山嘉樹	横浜
竹沢先生と人	14	長与善郎	小田原、箱根
痴人の愛	14	谷崎潤一郎	横浜、鎌倉
大山詣り	15	正宗白鳥	伊勢原
舶来巾着切	15	長谷川伸	横浜
春は馬車に乗って	15	横光利一	葉山、逗子
軍港行進曲	昭2	宇野浩二	横須賀
富士に立つ影	2	白井喬二	横浜、南足柄
唐人お吉	3	十一谷義三郎	横須賀
波	3	山本有三	小田原
街の国際娘	5	北林透馬	横浜
安城家の兄弟	6	黒見昌彦	鎌倉
かんかん虫はふ	6	吉川英治	横浜
ゼーロン	6	牧野信一	南足柄
霧笛	8	大佛次郎	横浜
黙移	9	相馬黒光	横浜、鎌倉
お伝地獄	10	邦枝実二	横浜
道化の華	10	太宰治	鎌倉
かめれおん記	11	中島敦	横浜
鎌倉夫人	12	深田久弥	鎌倉
沃土	12	和田伝	厚木
乗合馬車	13	中里恒子	逗子、葉山
歴史	13	神山潤	横浜
生々流転	14	岡本かの子	川崎

ごろまで発表された作品。神奈川の地を舞台にしているか、自然や風物、人物を題材にしている作品で、千八百一件の推薦があり、重複を除いた四百五十四作品の中から、表のように作家一人につき

品で、千八百一件の推薦があり、重複を除いた四百五十四作品の中から、表のように作家一人につき

品で、千八百一件の推薦があり、重複を除いた四百五十四作品の中から、表のように作家一人につき

品で、千八百一件の推薦があり、重複を除いた四百五十四作品の中から、表のように作家一人につき

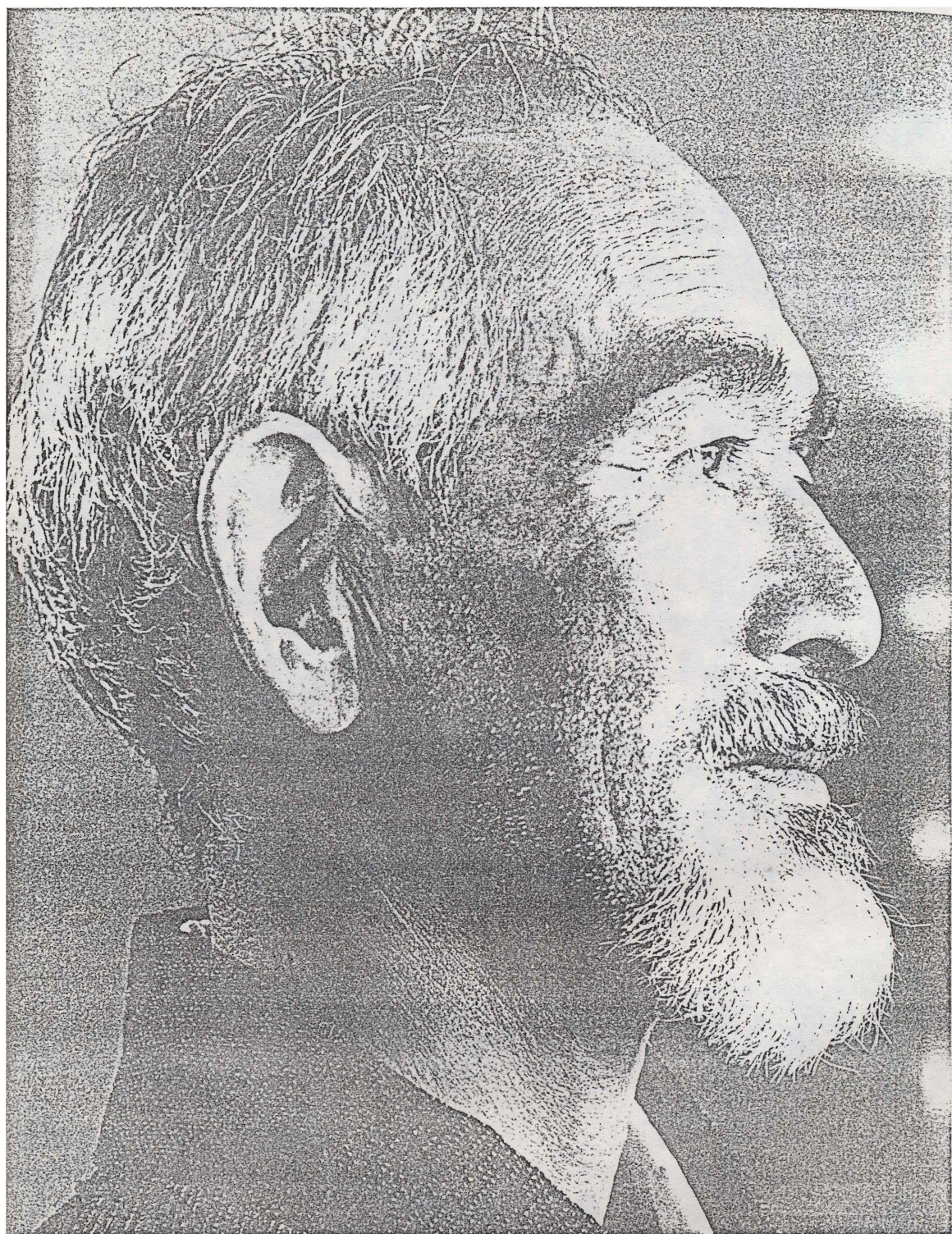
品で、千八百一件の推薦があり、重複を除いた四百五十四作品の中から、表のように作家一人につき

作品名	発表年	作家名	ゆかりの主な市町村
オリンポスの実	昭15	田中英光	鎌倉
大菩薩峠	16	中里介山	横浜、厚木、小田原
実朝記	18	小林秀雄	鎌倉
幼年期	18	島尾敏雄	横浜
わが住む村	18	山川菊栄	藤沢
姿三四郎	19	宮田常雄	津久井
黄金伝説	21	石川淳	横浜
さむい	22	熱田五郎	横浜
虫のいろいろ	23	尾崎一雄	小田原
ヨコハマ	23	平塚武	横浜
寒村	25	荒畑寒村	横浜
三太物語	25	青木茂	津久井
抹香	25	川崎長太郎	小田原
矢の津	25	金達孝	横須賀
風にそよぐ	26	石川達三	横浜
ハコネ用水	26	タカクラテル	箱根
ぶらり	26	高田保	大磯
胸より胸に	26	高見順	鎌倉、逗子
安宅家の	27	吉屋信子	大和
川上音二郎	27	村松梢風	横浜
灯台	27	堀田善衛	横須賀
花の生涯	28	舟橋聖一	横浜
遠来の客たち	29	曾野綾子	箱根
山の音	29	川端康成	鎌倉
太陽の季節	30	石原慎太郎	逗子、葉山
遠い青空	30	山川方天	平塚、茅ヶ崎、二宮
駅前旅館	32	井伏鱒二	藤沢
剣は知って	32	柴田錬三郎	小田原
日日の昔	32	丹羽文雄	湯河原
雲	33	永井龍男	大磯、箱根
葉山一色海岸	34	有馬頼義	葉山
箱根山	36	鍾子文六	箱根
海の沈黙	37	三好徹	横浜
江分利満氏の優雅な生活	37	山口暁	川崎
風の遺産	37	新田次郎	秦野、横須賀
季節のない街	37	山本周五郎	横浜
黒の試走車	37	梶山季之	箱根
子供部屋	37	阿部昭	藤沢
十二支	37	岡昇平	藤沢、厚木
午後五時の航海	38	目黒三雄	横浜
相模国愛甲郡中津村	38	松本清張	愛川
炎	39	永井路子	鎌倉
かの子	39	内田晴美	川崎
傷痕	39	島田治郎	横浜
海を見ていた	40	石本寛之	横浜
市街	40	岡松和夫	横浜
剣ヶ峰	40	立原正秋	三浦
夕雲	40	庄野潤三	川崎

バックの写真は数多くの作品の舞台となった箱根・芦ノ湖

『 かながわ 5 0 , 1 0 0 選 シ リ ー ズ の 推 移 』

年 度	推 選
5 1	かながわの名産 5 0 選
5 2	かながわの民俗芸能 5 0 選
5 3	かながわのうた 5 0 選
5 4	かながわの景勝 5 0 選
5 5	かながわの 1 0 0 人
5 6	かながわのむかしばなし 5 0 選
5 7	かながわのまつり 5 0 選
5 8	かながわの史話 1 0 0 選
5 9	かながわの名木 1 0 0 選
6 0	かながわの名産 1 0 0 選
6 1	かながわのまちなみ 1 0 0 選
6 3	かながわの文学 1 0 0 選

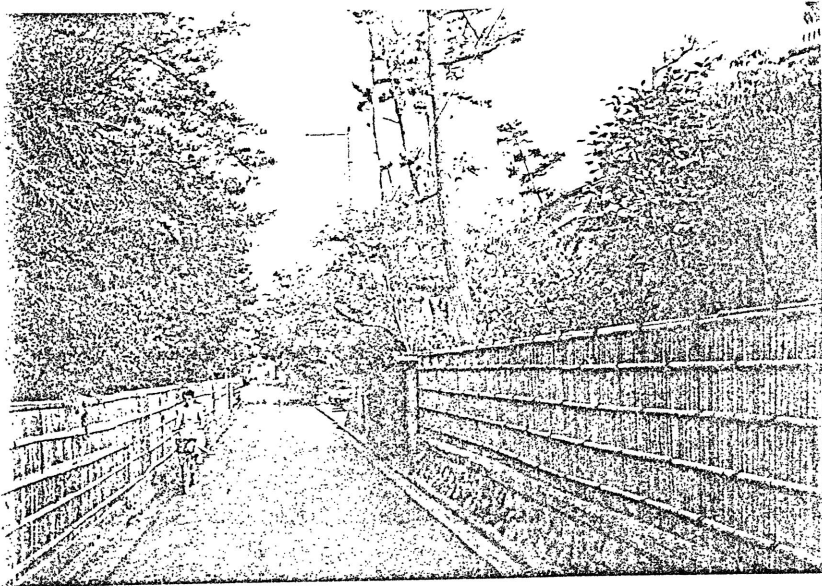


相 州 鵠 沼 邑 文 学 (二)

志 賀 直 哉

塩 沢 務

はじめに。神奈川県のため「ふるさと神奈川」を再発見として51年度から、50選、100選と12回目を迎えたなかで。わかまち湘南の風景写真62, 63年と鵠沼松が岡の別荘地の紹介がありました。



鵠沼松が岡界限(かいわい)

63年6月には「文学の薫り豊かなわが郷土」「神奈川の文学100選」が発表されました。「鵠沼行。志賀直哉」大正6年作品が選ばれましたので会の学習用に取り上げて見ました。

※お知らせ。県立神奈川文学館にて「湘南の光と影」7月23日(土)ー8月28日(日)展示ホール1,2階、で開催されます。湘南の地は明治18年大磯。19年『鵠沼海岸に海水浴場が開かれた。(藤沢医史ヨリ)』20年東海道線藤沢停車場開業。鵠沼館旅館開業。「年代?待潮館、対江館後中屋旅館」21年神奈川県、海水浴場男女区域を設け、混泳を禁止。

25 年東屋旅館が開業した。35年江ノ電藤沢―片瀬間（現江ノ島駅）開通、鶴沼停留所開業。その温暖な気候と明るい光を求めて、多くの文学者や芸術家が静養と仕事に訪れている。明治、大正、昭和の文学者たちの足跡や作品を足掛にして地域を探りたいと思い、お知らせ致します。

志賀直哉略年譜（明治16年～昭和46年）（1883-1971）

※明治16年（1883）2,20 日宮城県石巻町で生れた。父直温、母銀の次男。長男直行は前年11月夭折した。直温は、慶応義塾の出身、当時第一銀行石巻支店に勤務。志賀家は、近江国志賀直為からはじまる。三代目以降代々相馬藩に仕えた。文政10年生の直道は、二宮尊徳の弟子で、福沢諭吉の門に入ったこともあった。明治維新後、中村藩の権知事、福島県大参事を経て、疲弊した旧藩主相馬家の再興をゆだねられてその家令となり、古河市兵衛とともに足尾銅山の開発に力を傾けた。この祖父は武者小路実篤。内村鑑三とともにもっと強い影響を受けた人物の一人と直哉は語っている（内村先生の憶い出）天保7年生まれ of 祖母留女は福島県出身の木村弥惣左衛門重基の次女。「或る朝」「大津順吉」「祖母の為に」「和解」などをみてもわかるように直哉の成長期に、この留女の果たした役割は多大で、その第一創作集は、祖母の名をとって「留女」と名づけられた。母銀は、伊勢亀山城主の家臣佐本源吾の四女「暗夜行路」のなかでも、謙作が伊勢の亀山を訪ねる場面がでてくる。祖父、祖母、父、母いずれも。志賀文学にしばしば登場し、強烈な印象を読者に与えている。

※明治18年父直温、第一銀行を退き、一家は上京し、麹町区内幸町

順吉は十四になる弟の順三の声で眼を覚した。

「今日皆で拓殖博覧会へ行くんですって。お兄様いらっしゃらない？」
襖の外でこう云っている。「皆って誰なんか行くんだ」

「みんな」「お祖母さんや昌ア公までか？」「ええ」順吉はむっとして
黙って了った。「お兄様、いらっしゃらない？」又弟が云った。

「今日は日曜じゃないか。そんな人込みに年寄や子供で行ってどうする
んだ」「いらっしゃらないの？」

「とても行けないって云ってくれ」「え」

間もなく順三の梯子段を下りて行く跼音が聞えた

順吉も起きた。そして少しふくれ面をして茶の間へ出て行った。皆は
着物を着更えていた。祖母は皮の信玄袋の口をゆるめて、ハンケチだの
煙草入れだの千金丹だのをそれへ詰めていた。昌子は友禅の着物を着せ
て貰って、その長い袖を持ち扱う風で、両手に一ト巻き巻いて、ぶくぶ
くした足袋を穿いた足でその辺を駈け廻っていた。

「僕が行かなければ男は誰が行くんです」

順吉は露骨に不機嫌を見せて祖母に云った。

祖母は一目も二目も置いた調子で「お兄様がいらっして下さらなけれ
ば可恐い」と上の妹が云っていたと云うよな事を云って、

「お前が行かなければ仕方がないから、丁度石井が来たから、あれに連
れて行って貰おう」と云った。

「何しろ乱暴だ。途中は俤で行ってもいいが、中へ入ればもう同じです
よ。第一そんな人込みで何が見られるもんですか。新聞で見たって解っ

ているじゃありませんか、年寄や子供で遊びに行ける場所でない事は」
「それならよすか」「無論およしなさい」「昨日から皆たのしみにして
いたんだっけが……」迷児が出来たり怪我人が出来たりする事を思え
ば、そんな事は何でもないさ」祖母は困ったと云う笑いをして黙って了
った。傍で黙ってそれを聴いていた十二になる淑子が母や隆子（十歳）
が未だ着物を着更えている倉のしころの方へ行った。すると隆子の、
「つまんないの」と鼻声で云うのが聞えた。もう支度の出来上った英
子（十六）がその正月に生れた末の妹を抱いて座敷の方から出て来た。
そして、「お兄様、いらっしゃらないんですって？」と云った。順吉は
怒るように云った。妹は氣圧されたような顔をした。

「あぶないから、行ってはいけないと…」少し厭味らしく祖母が云った
「皆もおやめなの？」こう云って英子もがっかりしたような顔をした。
其処に、「今日はおやめですか？」と母が笑いながら、羽織を手に持っ
て出てきた。「そうなんですって」英子も少し不平らしく云った。

「総勢にしたら八人位じゃ有りませんか。若い者でもその人数じゃはぐ
れる位だ。はぐれまいとするだけだって何が見ていられるものですか」
「つまんないわ」と隆子が故意にそう云う顔をして母の袖にからまりつ
いた。「誰だ。青山へお葬式の車を見に行ってはぐれた奴は」順吉は
隆子をにらみつけてそう云った。「ふうんふうん」と半分笑いながら隆
子は泣くような真似をして母の後に隠れた。「植木屋に連れられて泣い
て帰って来たんです。ああ、いやいやそんなにからまっちゃあ。帯がぐ
ずぐずになって了う」と母は隆子を叱った。「真実におやめの方が無事
ですよ。歩いて半杭さんへ行って又皆で日比谷へおいでなさい。それが

一番安心でいい」と母は笑った。独りむっとりしていた順三が、「日比谷なんか、つまんないや」と云った。

「向島の百花園に行ってみますか」と僅な希望をつなぐように祖母が云い出した。皆は黙って順吉の顔をうかがった。

「そりゃあ拓殖博覧会よりは幾らましかも知れないけれど、何しろ浅草の方ですからね、若し電車で行くなら危ないな。おまけに船もあるし」
こう云うと子供達の顔には一せいに失望の表情が浮び出た。

「こんなにみんな支度が出来たのにねえ」と隆子はわざと大人びた調子で上の姉を顧みた。「馬鹿」と英子は笑いながら隆子を叱った。」座敷の方から四つなる昌子が走って来た。未だ長い袖を手へ巻きつけて上げるようにしている。「お兄様、博覧会にいらっしゃらないの？」

「うん。もう皆博覧会はおやめだ」「もう博覧会はおやめ？何故」

「あぶないから」「何故あぶないの？」「お前が迷児になるといけないから」「昌アちゃんが迷児になるから？」順三が癪癪を起して、

「昌アちゃん、黙っといで」叱った。昌子は吃驚して、大きな眼を一層大きくして順三を見上げた。然し、黙らなかった。

「昌アちゃん迷児にならないわ。福やにおんぶするわ、ね、昌アちゃん迷児にならないわ」そう云って順吉を見上げた。

「お前がならなくても、隆子姉ちゃんが迷児になるからいけない」順吉は隆子を見て笑った。「まあ、いやだ」隆子は次の間に逃げて行った。

母も倉の方へひき返して行った。「いっそ鎌倉へ行きますか」又祖母が如何にも億病らしく云い出した。鎌倉というのは祖母には義理の子になっている順方と云ふ順吉の四つ上の叔父の家を意味していた。

「鎌倉ならいいでしょう」「鎌倉なら兄さんも往ってくれますか？」

「ええ」 祖母は急に嬉しそうな顔をした。そして、「兄さんに往って貰えば安心だ。淑子」と淑子を顧みて、「兄さんが鎌倉へ連れておんなると」と云った。 淑子は終りまで聞かずに走って行った。これが伝わると急に皆元気づいた。「こう多勢で押しかけたら、お峰さんは大まごつきかも知れない」と母が云った。「全体何人だ」順吉は祖母から女中まで指をり折って数えてみた。「十人だ。とてもあの家には入りきれませんよ。第一それだけのめしが不意に行っちゃあ出来まい」

「それなら三つ橋へ行って呼びますか」と祖母が云った。

結局、鶴沼の東家へ行く事になった。そして、もう何も支度の要らぬ順三を直ぐ一足先に鎌倉へやって、鎌倉の連中を皆誘って来さす事にした。順吉は先へ往った順三を除き、あと大小八人を宰領して家を出た。それは秋の秋らしくよく晴れた気持のいい日だった。

品川の海を眺めながら順吉は、

「博覧会のゴタゴタへ行くより如何によかったか知れやしない」と云って並らんで腰かけていた祖母を顧みた。

彼は皆の博覧会行きを頭から反対したのは自分の我儘からではないと思っていた。然しその仕方は少し酷かったと考えた。毎日々々勝手に遊び廻っている自分が皆の楽しみにしていたたまの外出にああ云う調子で物を云った事は少し心にひけていた。彼は出来るだけ今日を、皆にとって愉快なものにしたいと思った。

大船でサンドイッチを子供等に一つずつ買った。藤沢から電車に乗り

かえた。鵠沼の停留場から祖母と赤児の禄子だけを俵に乗せ、あとは砂地の路を歩いて行った。東家に着いた。二階の広い部屋に通された。直ぐ向うに江ノ島が見える。小さい連中は喜んで縁へ出た。

鎌倉の連中は却々来なかった。「何してるのかしら。まささん（叔父にあたる順方を順吉は子供からの習慣でそう呼んでいた）が御寺へでも往っていたかな」

「お峰さんや、お泰さんがおめかしでもしてるんでしょうよ」と云って母は笑った。「腹が空いて了った」

「兄さんは朝御飯を食べずだから、空いたでしょう。昌子の手をつけないサンドイッチがありますよ」と母が云った。「もう来るでしょう」

女中を呼んで彼は昼の物を云いつけた。それから彼は小さい連中に、「御飯の出来る間、海の方へ往って見ようか」と云った。皆は喜んだ。

禄子だけ置いて、下駄を廻して貰って庭から出た。隆子は一人だけ真先に駆け出し、芝生の彼方のブランコへ往った。皆は池のふちについて海へ出る木戸の方へ歩いた。池に舟が浮んでいた。「乗ろうか？」と順吉は淑子を顧みた。「乗りましょう。隆ちゃん。お舟に乗るのよ」と淑子は大きな声で隆子呼んだ。隆子は直ぐ駆け来て。「みんなしゃがんでるんだよ」女中共都合六人乗り込んだところで、「いいか？」と云って順吉は岸へ竿を張った。初めて舟に乗った昌子は中腰をして舟べりにつかまったまま、不安な真面目顔をしてその辺を見廻していた。「母ァさん」隆子が大きい透る声で遠い二階へ呼びかけた。

縁側に坐って、らんかんの間から頭だけ見せいた母が此方に向いた。母はらんかんにつかまって起ち上った。そして後を向いて何か云うと、

祖母も縁に出て来た。母はハンカチをふった。祖母は小手をかざして見ている。「お祖母ッさん」と又隆子が大きな声をした。

昌子と一緒に「母ッさん」と呼んだ。

「橋だ橋だ。みんな頭を下げろ下げろ。吉枝、昌ッ公を抱け。手をはさむと大変だぞ。いいか」順吉は勢をつけて竿を一突っ張って、自分も頭を下げた。舟はすーっと水の面を滑って橋の下をくぐった。暫く漕ぎ廻ってから皆は舟から上った。そして小さい木戸から路へ出た。波の音が秋の穏かな空気に響いていた。皆は路から草の生えた砂原へ入った。少し行くと小さな流れに出た。人の跼音で、小さい魚の一群が浅い流れを水底にうつる自身の影と一緒に逃げて行った。

「此処からは行けないな」順吉は流れの上下を見渡しながら云った。

「さっきの路をずーと廻らなくちゃ駄目だ一兄さんがおぶってやろっかそれとも足袋を脱いで皆渉るか？」淑子と隆子が顔を見合わせて嬉しそうな顔をした。順吉先ず自分から足袋を脱いで袂に入れるとヒヤリとする黒い砂に立った。自分の足がいつになく白く見えた。皆もそうした。昌子まで一人で足袋を脱ぎかけた。

「昌ッ公はそのままでもいい。兄さんが抱いてってやる」こう云って抱き上げると昌子は黙って反りかえった。「いやか？ お前も渉るのか？ ころぶと大変だよ。いいおべべが濡れちゃうよ」そう云っても昌子は黙って無闇と反りかえっておりようとした。「吉枝、そんなら脱がしてやれ。それから俺の下駄を持って来てくれ」

昌子は嬉しそうに皆の真似をして、裾を上げて流れへ入ろうとした。

「もっと、まくらなければ駄目だ」順吉は引きずりそうな長い袂を背中

で結んでやった。淑子に「もっと、もっと」と笑いながら云われて昌子は自分で、へその出るまで着物をまくった。淑子と隆子は声を出して笑った。「つべたいわ」と昌子は後からついて来る順吉を見上げて云った。実際それは痛い程つめたい水だった。

流れを涉ると乾いた白い砂原へ出た。皆は裸足のまま草も何もない砂原を波打際の方へ歩いた。秋も末に近かったから海岸に遊んでいる客らしい人の姿は見なかった。皆は自家の庭で遊ぶ時のように顧慮なく笑いながら行った。

波打際では皆裾をまくって、寄せる波に足を洗わして遊んだ。順吉は浅い所で波の寄せる間、昌子を抱き上げていて、その退く時、下してやっていた。昌子は後から持たれるのを厭がって、下すと直ぐチョコチョコと其処を離れて、独りでその足許を見て立っていたがった。

「倒れるぞ」と順吉は云った。

「何だか眼が廻って来るわ」とわきで同じ事をしていた淑子が云った。

「こうやってると踵の下の砂がなくなるだろう？」「ええ、後へ倒れそうになるわ。昌ッちゃん。独りでそんな事をして、倒れたら大変よ。波にさらわれてよ」昌子は怒ったような眼をして淑子を見かえしていた。石や貝を拾う事にした。小さい桜貝が沢山あった。

「皆おなかが空いたろう」と毛ずねを出して砂に腰を下していた順吉が暫くして皆に声を掛けた。

「隆ちゃんは少しも空かない事よ」と直ぐ隆子が答ええた。

「もう一時半だ。御飯を食べて若し早かったら江ノ島へ行って見よう」とにかく、帰る事にして順吉は昌子を呼び、思い気ってまくり上げてい

る着物を着せ直してやった。丸くふくれた小さな腹には所々に砂がこびりついていて、そうして身体だか、着物だか、もう磯臭いにおいがしていた。今度は流れを涉らずに橋から廻って帰った。池で順三が鎌倉から来た昇（昌子と同生年れ）を舟に乗せて遊んでいた。

鎌倉から四人来て、総勢十四人になった。食事をして話していると、四時過ぎた。江ノ島へはもう時間がないので、土産物の饅頭を買い旁々、片瀬の竜口寺へ行く事にして、其処を出た。竜口寺では皆新しく出来た五重塔の横から裏の山へ登った。祖母と順吉だけが本堂の前で皆の降りて来るのを待っていた。

「学習院の水泳で初めて来た時に、今はありませんがあの山門の右に法善坊という小さな家があって、そこへ泊っていたんです」と順吉がいった。「何んぼ止めても諾かずに出掛けて……」と祖母は笑いながら答えた。「今の隆子位でしょうか？ 何しろ初めて一人で出たんだから急に心細くなったんですね。それに蚤が居て眠れないので尚まいったんですよ」「日に二本も三本も、はやくむかいにくるべし、と電報のような手紙をよこして……」

「清吉が来た時には嬉しいんだか悲しいんだか知らないが大きな声をして泣いたのを覚えていますよ。それから、それは自分では覚えていないが、お祖父さんの名宛にして様の字を書かずに出したとか……」

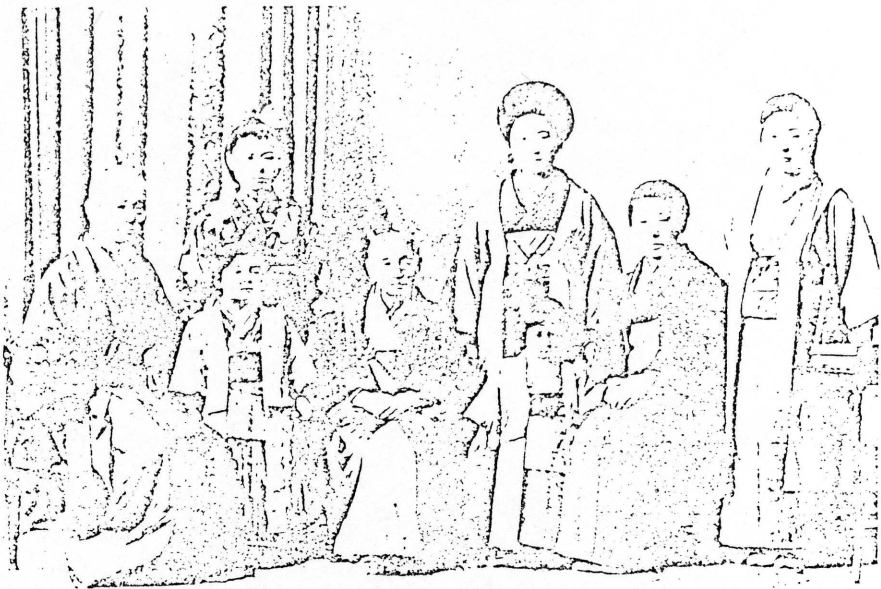
「そうだった」と祖母は笑った。

「書くのを忘れたんですかネ。それとも迎いの来ようが遅いので怒っちゃったのかしら」五重塔とは反対側の道から隆子が昇の手をひいて下りて来た。平地へ来ると二人は手を離して競争するように祖母と順吉の立

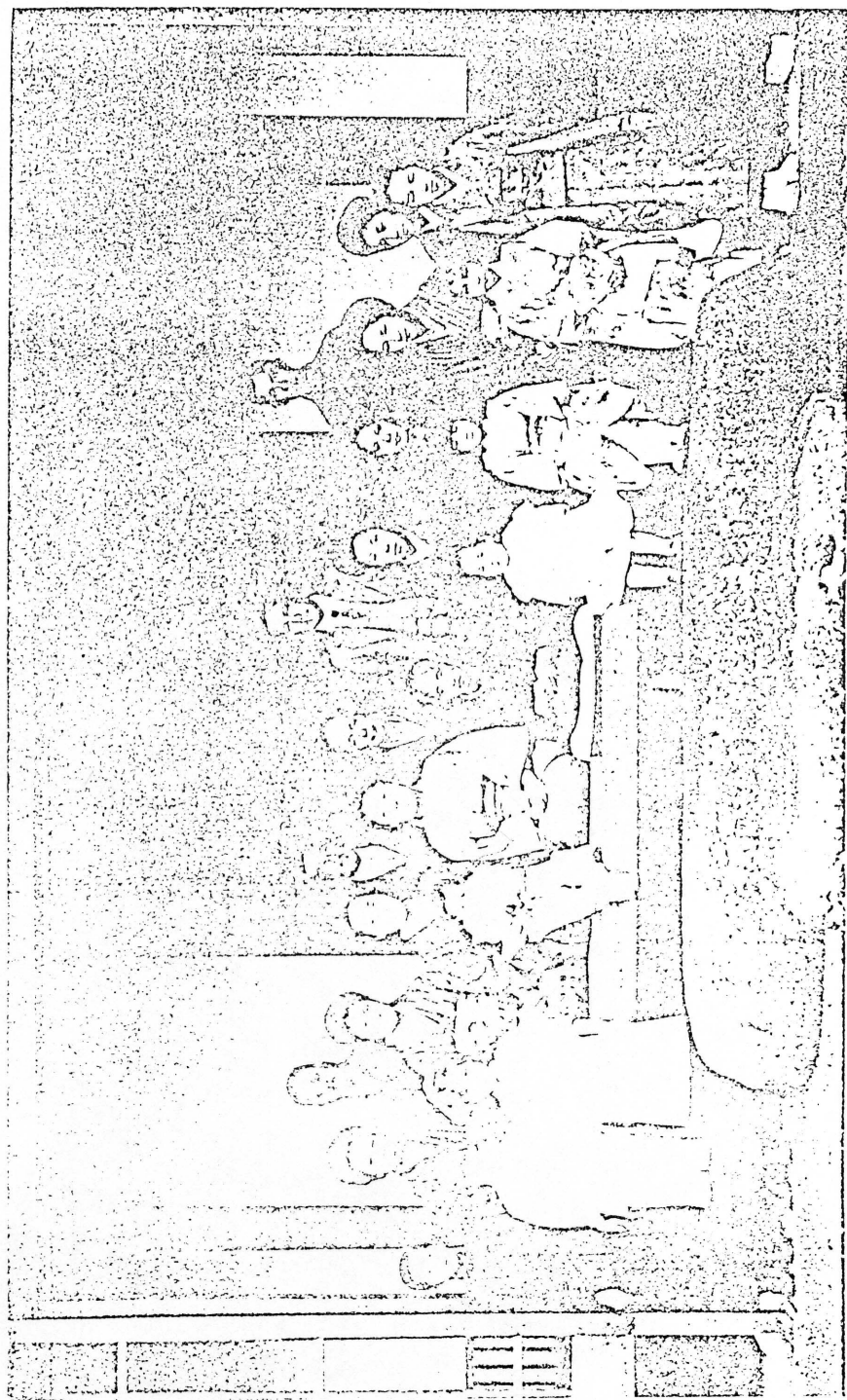
っているところへ駆け来て。間もなく皆も下りて来た。石段の下の饅頭屋に休んで電車の来るのを待った。

電車の窓から七里ヶ浜の夕方の景色を見て行くのが順吉の予定だった。然し日曜で、江ノ島からの帰り客で、電車の中は一杯だった。祖母と禄子を抱いた母だけが人の好意で漸く腰かけられたが。あとは押され押されて鎌倉へ入るまで立っていなければならなかった。鎌倉へ着いた時は全く日が暮れていた。停車場では駅長の好意で祖母だけ橋を渡らずに赤帽におぶさって線路を越した。皆が橋から廻って其処へ行った時には如何にも疲れたらしい様子をして祖母は板ばりに附いた低い腰かけに背中を丸くして一人腰かけていた。順吉も今は何となく疲れていた。

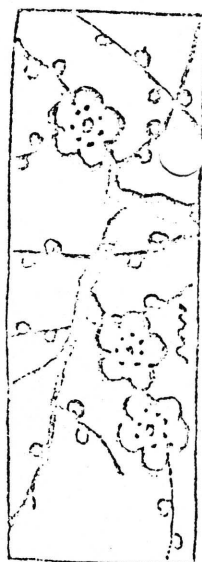
汽車が来た。鎌倉の連中とは其処で別れた。一行は二時間程して漸く新橋に着いた。昌子も禄子もたわいなく眠入っていた。



志賀家の人々 前列左より直温(63), 昌子(8), 留女(80), 禄子(4), 義母浩(44), 後列左より隆子(13), 英子(19), 淑子(15) 大正4年2月14日撮影。
この月、直哉は父との不和からすすんで除籍、べつに一家を構えた



麻布三河台の志賀邸にて。大正6,7年頃(大正6年8月直哉は父と和解した)前列左から實吉純一,志賀昇,實吉縫子,實吉安彦,志賀良子,志賀昌子,岩城,中列左から岩城ジュン子,志賀隆子,實吉英子,實吉繁子(赤子),志賀浩,志賀留女,實吉綾子,志賀峯,實吉百合子,志賀淑子,後列左から志賀直方,實吉純郎,志賀直温,實吉敏郎,直哉



「鵠沼」昭和63年7月43号

昭和63年7月12日発行

鵠沼行 志賀 直哉

(学習用冊子部数35部)

発行所 鵠沼公民館

藤沢市鵠沼海岸2-10-34

電話 33-2001

編集 鵠沼を語る会代表塩沢務

藤沢市鵠沼海岸3-12-33

電話 36-787